経営論集　第17巻第1号　2007年　7～18頁

経営者における道徳と宗教
――渋沢栄一と帰一協会――

島　田　昌　和

はじめに

渋沢栄一（1840～1931年）は、1916年に77才を期として第一銀行頭取を退き、実業界の第一線から完全に引退した。引退後に自らが取り組む、残された三事業として「経済と道徳の一致」、「資本と労働の調和」、「細民救恤手段の統一」の3つを挙げている。(「老後の三事業」『時事新報』1918年1月1日、『龍門雑誌』第357号に再録、1918年2月）これらの3つの問題は、その後亡くなるまでの10数年間に渡って精力的に取り組まれた、まさに生涯をかけた渋沢のやり残した未完のテーマとも言う事のできる日本そのものが抱えた大テーマであった。

これまでこれらの領域に関しては多くの研究が蓄積されている。労働問題に関する中心組織となった協調会に関しては近年急速に研究が進んでいる。(木下順［1995］［1997］、島田昌和［1989a］［1989b］［1990］［1995］、高橋彦博［2001］、法政大学大原社会問題研究所編［2004］）民間外交に関しても日米関係を中心として「青い目の人形交流」などを含めて研究がなされている。(木村昌人［1989］、大城ジョージ［1990］、是沢博昭［1992］)経済倫理や道徳に関してはまさに渋沢研究のメインフィールドとも言うべき多数の研究が存在する。(瀬岡誠［1976］［1977］、小野健知［1979］［1980］、多田顕［1979］［1980］、永安幸正［1985］、浅野俊光［1991］、王家［1994］、梅津順一［1995］、植松忠博［1998］、松川健二［1999］、坂本慎一［2002］［2004］など）

しかしながら、渋沢は第一次世界大戦以降の大正後半期に帝国主義の軋轢やマルクス主義の影響など、大きく変化する社会そのものを問題視していた。先の3つの領域はその問題が最も顕著に現われた領域に過ぎず、社会変化の根本をどう考え、どう対処すべきなのかについて大いに悩んでいたのであった。その悩みを解決してくれる糸口として熱心に取り組んだのが様々な学者や思想家、宗教家が集った「帰一協会」であったと考えられる。

しかしながら「帰一協会」の研究は資料の制約や活動の成果の乏しさからか、その絶対数がまず少ない。さらに関与した中心メンバーの分析は姉崎正治と成瀬仁蔵を中心としたものに限られており、渋沢栄一の評価は会のパトロン的な存在（高橋原［2002］45頁)、または「統一的宗教」を求めた点で成瀬に近い評価に留まっている。しかし、実際には渋沢は5人しかいない幹事に名を連ね、毎月の例会に欠かさず参加し、残された記録を見ても会員中最も多くの問題提起を行っていたのである。

以上の事から、第一次大戦勃発による文明の発達と道徳の乖離という、渋沢が感じた大きな

社会的な危機を乗り越える重要な糸口として、渋沢自身の思想や理念を考察する上で帰一協会での活動と渋沢の受けた影響を分析していく。

（1）帰一協会の設立

帰一協会は、「異なる宗教が相互理解と協力を推進して『堅実なる思潮を作りて一国の文明に資す』」ことを目的として1912（明治45）年に設立された[(1)]。（沖田行司［1999］243頁）

そもそもは「明治四十四年夏成瀬仁蔵さんが発起して之を渋沢子爵と先代の森村市左衛門男爵に話されたのが始まり」と言われている。（「青淵先生関係事業調」（姉崎正治氏談）渋沢青淵記念財団竜門社編［1960］第46巻、414頁）成瀬仁蔵が渋沢や森村市左衛門に呼びかけて1911年頃から「現代思想改善」や「宗教統一」のための準備会合を持っていたものであった。（高橋原［2002］ 44頁）さらにこの背景としては1910年の大逆事件や社会主義思想の勃興という世相を背景に、支配者層は国民統制の一手段として宗教に期待をかけており、1912年6月の床次竹二郎の主導による三教合同の会合に起源が求められている。（高橋原［2002］43頁）

このような前史を経て、1912年4月11日に第1回の会合が、成瀬仁蔵の呼びかけにより井上哲次郎、中島力造、浮田和民、姉崎正治、上田敏、シドニー・ギューリックらを渋沢が招待する形で開かれて発足した。（沖田行司［1999］249頁）会の活動内容としては、宗教・哲学・道徳・社会・教育・文学に関する論文や評論を掲載する雑誌を刊行し、内外の学者の交流や国際会議、および講演会等の開催を企画していく事とされた。（沖田行司［1999］250頁） 実際、『帰一協会会報』を年2回のペースで発行し、毎月、例会を実施していた[(2)]。渋沢は設立からしばらくの間、毎回欠かさず例会に出席していた。

会の運営の中心を担った「幹事」には、成瀬仁蔵、浮田和民、姉崎正治、渋沢栄一、森村市左衛門の5名が就任した[(3)]。（『帰一協会会報』第二号、1927年7月発行）その中でも「この会の運営を担っていたのは姉崎と渋沢」であったと言われている。（磯前順一・深沢英隆編［2002］63頁）

会の参加者は学者や宗教家、それ以外に「政府が直接関与しないものの官僚や政治家、財界人など支配階級の人々が広範に参加」した。（磯前順一・深沢英隆編［2002］62頁）参加者数であるが、初期の会員数が63名、1929年時点の会員数は119名である。（『帰一協会会報』第一巻末会員名簿数1913年2月、高橋原［2002］48、54頁）毎月の例会の出席者数は1912年の第1回例会参加者数40名であり、1929年頃の例会出席者数は20名前後であった。（高橋原［2002］48、54頁）

会の常連メンバーであるが、幹事5名以外には上田敏（京都帝国大学教授・文学者）、シドニー・ギューリック（宣教師・同志社大学神学部教授）、中島力造（東京帝国大学倫理学教授）、阪谷芳郎（渋沢娘婿・東京市長等）、井上哲次郎（東京帝国大学哲学教授）、原田助（同志社大学教授・総長）、桑木厳翼（東京帝国大学哲学教授）、森村市左衛門、床次竹二郎（内務官僚・政治家）、荘田平五郎（三菱）、塩沢昌貞（早稲田大学総長・経済学）、服部金太郎（精工舎）、

矢野恒太（第一生命）などであった。やはり学者と実業界からの参加者が多い。

(2) 中心メンバーのそれぞれの設立意図

帰一協会に何を期待していたのかは幹事を務める中心メンバー間でも、微妙に異なっていた。その相違を検討していこう。

①姉崎正治

帰一協会の事務局は当初、姉崎の自宅（東京市小石川区指ケ谷町）に置かれたことからわかるように、東京帝国大学宗教学講座担当の教授であった姉崎正治が当初から帰一協会の理論的な中心であった。姉崎は床次竹二郎と意見が一致し、三教合同や宗教家教育家大懇談会で中心的役割を果たしていた。（磯前順一・深沢英隆編［2002］61頁）

1912年10月の帰一協会の第2回例会で「宗教は、人生の他の活動、即ち道徳、教育等と等しく、人性の必然に出でたる活動にして、相共に共通の根底を有し、同一根本より出で、今日の如く分岐を生じたるものなり」との談話を示している。（『帰一協会会報』第一、31頁）その後の姉崎がよく用いた表現として「銀行には精算所があって連絡を計ってゐるが、宗教の間にもかくいふものがほしい。この精算所が少しは指導を与へると云ふことも考えられる」という比喩的表現がある。諸宗教に対して「折衷混和にあらず、中心精神の融化」、すなわち多元主義的態度を維持していたと評されている。（「姉崎正治談話筆記」渋沢青淵記念財団竜門社編［1960］第46巻、415頁、高橋原［2002］46～47頁）

②成瀬仁蔵

日本女子大学の創立者成瀬仁蔵は「帰一協会の起るに深い関係のあったのは成瀬仁蔵と云ふ人である」との記述があるように帰一協会に大きな期待をかけていた一人であった。（『龍門雑誌』637号、渋沢青淵記念財団竜門社編［1960］第46巻、417頁）帰一協会に対して「成瀬氏等は新宗教を創り度いと偉い主張をなした。何でも仁義忠孝では宗教的に一切を包含したものでないと云ふのであった。」との考えが強かったようである。（「雨夜譚会談話筆記」渋沢青淵記念財団竜門社編［1960］第46巻、413頁）一方で姉崎の談話に「成瀬さんは・・（中略）・・宗教合一とは考へないが、他の人と違って宗教にも道徳にも色々ある、・・（中略）・・然しその根本は一つである」ともあり、この意味するところがあくまでもすべてを包含する新宗教の創出なのか、時期の相違による考えの変化なのかは不明である。（「姉崎正治談話筆記」渋沢青淵記念財団竜門社編［1960］第46巻、415頁）

③森村市左衛門

実業家の森村市左衛門であるが「森村翁の言い分は何とかして宗教を合一したい」と評されている。渋沢の談話に「主として森村市左衛門と女子大学の成瀬仁蔵氏とが力を入れて、会を

作る様になったものである」と記されている。（「雨夜譚会談話筆記」渋沢青淵記念財団竜門社編［1960］第46巻、412頁）さらに「森村氏は私と違って儒教主義に拠らず、初め仏教にしようか基督に頼らうかと迷って居た」とも記されている。一般的にはキリスト教を信奉した経営者と位置づけられているが、帰一協会に対しては例会記録等を見ても出席は少なく、積極的、明確な発言記録があるわけではなかった。（「姉崎正治談話筆記」渋沢青淵記念財団竜門社編［1960］第46巻、415頁、土屋喬雄［1967］参照）

④浮田和民

浮田和民は例会への出席が毎回欠かさずというほどでもなく、また会報に記載された質疑応答の記録はさほど多くない。「一種の社交倶楽部にとどまり・・・到底有効なる活動は之によりて期待せらる可くも無く」と不満を持っており、1914年頃には帰一協会の活動を批判したとも言われている。（高橋原［2002］45～47頁）

浮田は帰一協会の設立に当たり、「諸宗教が各々其力を尽して自由競争をなすべきも、終いには如何なる方面かに一致の帰着を得べきではないか」とその意見が紹介されているように、宗教間の共通理念の抽出に期待を抱いていた。（『帰一協会会報』第一、5頁）1912年10月の第3回の例会で「内外思想界の趨勢と宗教信念」と題する講演をしている。「人類が宗教的信仰に於て一致する迄は、真正の帰一を見る事困難であらうと思ふ」といった否定的な発言が述べられている。それと同時に「儒教、仏教、基督教の三教亦漸を以て帰一せんとする傾向を有して居ると信じる」とも発言していてその思想に多少の揺れ幅が感じられる。（『帰一協会会報』第一、54～55頁）

⑤井上哲次郎

東京帝国大学哲学科教授の井上はキリスト教排撃論の中心人物として有名であるが、キリスト教のみならず迷信的要素を含む既成の宗教に否定的であった。しかし同時に、「完全なる宗教は将来に於て実現されるべきである。是を理想的宗教と名づけ、又簡単に理想教と云った」と述べ、「宗教の寺院、儀式、教義等の外形的なものを超えた倫理ないし道徳」面での各宗教の根底に於ける契合点を見出すことを提唱していた。（井上哲次郎「渋沢子爵追憶談」1941年、渋沢青淵記念財団竜門社編［1960］第46巻、416頁、高橋原［2002］46頁）

⑥阪谷芳郎と穂積陳重・重遠らの参加

帰一協会には渋沢の娘婿の阪谷芳郎・穂積陳重（法学者・東京帝国大学教授・枢密院議長）にも参加の呼びかけがなされた。穂積は「穂積さんは不賛成だった。出来ない相談だと云ふのである」として入会しなかった。その後、息子の穂積重遠（法学者・東京帝国大学教授）が参加した。阪谷であるが「阪谷さんは結構と云はれた。何か一つ主題を作って指導の言泉を与へたいと云ってられた」として参加している。（「姉崎正治談話筆記」渋沢青淵記念財団竜門社編

［1960］第46巻、415頁）しかしながら1912年7月の初例会で、阪谷は「（教育）勅語の御趣旨と相反する宗教は、日本に存在を許さぬのである」とか「忠孝を無視する宗教は成立すべからざるもの」との談話が記されている。（『帰一協会会報』第一、29頁）

このような立場は、例えば姉崎と相容れなかったようである。1921年時点の姉崎によるギューリック宛の書簡に「阪谷はあらゆる方面で、義理の父［渋沢］を助けていますが、この義理の子はいささか反動的になりつつある、［反動的］ということばが強すぎるとすれば、父よりもリベラルでなくなりつつある」との言葉が残っており、それを裏付けするようなスタートであった。一方、穂積重遠に対しては「帰一協会のなかでは若い穂積［重遠］がおそらく自由に意見を交換でき、また互いに意を同じくして受け入れうる唯一の仲間です」との信頼が寄せられた。（磯前順一・深沢英隆編［2002］84頁）

（3）渋沢栄一のいだいた期待

それでは渋沢自身はいかなる期待と目的を持って帰一協会に参加したのかを検証していく。まず会の設立に当たって渋沢は「現今日本に於ては、諸種の宗教並びに道徳主義雑然として、人心の帰着に迷ふ事多し、吾人は如此状態に甘ずべきか、思想界の指導者は之に対して如何に考へらるるか、又東西文明の関係も、単に国際の問題にあらずして此の辺に関係なきか」と述べ、東西文明や国際問題の中での宗教と道徳を取り扱うことを表明している。（『帰一協会会報』第一、1頁、渋沢青淵記念財団竜門社編［1960］第46巻、407頁）同時に「帰一する所を求めたいと企てたのは・・・人心を正道に帰せしめたい」からであり、「協会の事業を益々進歩拡張して是非混濁の人心を覚醒させたい」と述べ、人々が正道になく混濁している現状を訴えている。（帰一協会会報』第二、86～87頁）そのために渋沢は「儒教、仏教、耶蘇教等あらゆる宗教の長所を折衷綜合したる統一的の一大宗教」を求めたとの評価がなされているが、渋沢の統一的大宗教の意味するところはその発言の時期で微妙に変化している。（高橋原［2002］45頁）

確かに渋沢は同時期の記述として「余は一般に宗教といふものに対しては疑念を挟み、・・・・現在の儒教、仏教、耶蘇教等あらゆる宗教の長所を折衷綜合したる、統一的の一大宗教は出来ぬものであろうかと、心に希望して久しい間これを考えて居た」とか「自分一人の理想としては神、仏、儒の別なく、それ等を統一した所の大宗教が出ればよいと希望して居る。言ふまでもなく宗教と謂はれる位のものなら、其の窮極の道理は一つであるから、此等を統一した宗教は出来ぬといふこともあるまい」と述べており、この時期統一的大宗教や新宗教への期待を表明していた。（渋沢栄一『青淵百話』1913年、渋沢青淵記念財団竜門社編［1960］第46巻、420～422頁）

周囲から見る渋沢の理解にもそれはよく表れている。井上哲次郎は「渋沢子爵は日本とアメリカの間の国際的融合に余程尽瘁され」、「渋沢子爵は会を開いたら其中、新しい宗教が生まれるかも知れないと云った」（井上哲次郎「渋沢子爵追憶談」『龍門雑誌』1941年10月、渋沢青淵

記念財団竜門社編［1960］第46巻、417～418頁）との談話を残している。

しかしその考えはこの会を重ねる中で変化していったように見える。晩年の聞き取りにおいて「各宗教を研究して、動かぬ所を掴む事が理想であったかもしれない。（中略）成瀬氏がそんな事を云っていたが、それは全然不可能であると思って居た」と統合的な宗教という考えは渋沢は持っていなかったと回顧している。（「雨夜譚会談話筆記」渋沢青淵記念財団竜門社編［1960］第46巻、414頁）

この回顧談ではそもそも渋沢は「私自身は初めから宗教に頼らず、孔子の教を以て是れなれば足ると堅く信じて居た」と述べており、さらに「宗教も政治界なり実業界に応用してこそ活きて来る。経済的観念のない宗教信者の働は頗るまだるつこい。また経済に従事する者がそれのみに傾けば、守る主義がなくなる。事業家が行住座臥、常に信仰する事は出来ないにしても、大体の教旨を作り、それに依つて信念を持つ必要がある。それにしても耶蘇や仏教や神でも困るから、儒教主義を根本として一種の宗教を組織したら」とあるように、渋沢の考えはビジネスなどの実社会での統一的な道徳規範を求めているのであって、宗教の色彩、観念は極めて薄かった。（「雨夜譚会談話筆記」1928年1月17日、渋沢青淵記念財団竜門社編［1960］第46巻、412～413頁）あくまで儒教倫理をその中心とすることを求めていたと述べている。

同時期の姉崎の回顧談でも「自分が一つ中心を作って実行しようとは子爵自身は思はれていなかったが、色々ある宗教をどのようにしたら良いか、合一出来るのは結構と思ふが、どうだろう、又出来るかどうか、そして今迄の歴史にも、どんなに偉い人が現れても合一しなかったから合一するのは難しいだろう、と言はれて、之等に関する学者を集めて相談したのが、前に申した討論である」と記されている。（「姉崎正治談話筆記」渋沢青淵記念財団竜門社編［1960］第46巻415頁）ここでも渋沢の宗教への期待とその実現に隔たりと悩みがあることを伺わせている。

以上の検討からわかるように渋沢の宗教に対する期待は時期によって変化していた。統一的な宗教や各宗教間に共通する根本理念の抽出といった当初の期待感から、宗教への期待が薄れ道徳に収斂していく変化のプロセスとその原因を検証する必要があろう。

（4）帰一協会の活動の停滞とその原因

帰一協会は1914年頃が会として一番成熟していたと姉崎によって述べられている。（「姉崎正治談話筆記」渋沢青淵記念財団竜門社編［1960］第46巻、416頁）その一つの理由が、渋沢によってさまざまな検討テーマが投げかけられ、それに対する回答を会として表明する活動を積極的におこなっていたからと考えられる。

渋沢は、1915年3月10日の帰一協会の例会で「時局に対する国民の覚悟」を表明した。1913年の排日土地法案の上程といった一連のアメリカ・カリフォルニアにおける日本人移民の排斥運動、1914年の第一次世界大戦の勃発等の世界情勢に渋沢は強い懸念を持っていた。すなわち、渋沢はこの文言の中でまず「一体文明とは如何なる意義のものであるか、要するに、今日の世

界はまだ文明の足らないのであると思ふ」と世界の置かれた状況に悲観的な見解を述べている。そのような情勢の中で日本は「已む事を得ずば其渦中に入って弱肉強食を主張するより外の道はないか」と疑問を投げかけている。しかしながら「我々は飽く迄も己の欲せざる処は人にも施さずして東洋流の道徳を進め、弥増しに平和を継続して、各国の幸福を進めて行」くべきであり、弱肉強食という欧米による国家的エゴイズムを克服する独自路線の模索を提唱している。（渋沢栄一「時局に対する国民の覚悟」『龍門雑誌』第328号、1915年9月、渋沢青淵記念財団竜門社編［1960］第46巻、585～586頁、沖田行司［1999］251頁）

さらに日本がイニシアチブを取って「単に国内の道徳のみならず、国際間に於て真の王道を行ふことを思ふたならば、今日の惨害を免れしめることが出来ようと信じる」と世界レベルでの道徳と幸福の追求を求め、「我々は此際大いにこれを融和する道がある、調節する方法があると思はれるであります。其のことに就いて諸君はどうか私の蒙を啓かかるやうに願いたい」と結んでいる。（渋沢青淵記念財団竜門社編［1960］第46巻、585～586頁）

このような渋沢の強い危機感を具体化するために帰一協会に対して「今回の世界戦乱に際し特に我が国民道徳の標準を確定する必要なきか」と問いかけ、浮田和民、中野武営、姉崎正治、阪谷芳郎など27名をメンバーとする「時局問研究委員会」を1915年3月に組織し、その後約9ヶ月かけて答申をまとめていった。（渋沢青淵記念財団竜門社編［1960］第46巻、587頁）

この答申は帰一協会が初めて世間に直接送ったメッセージと言われて評価されているが、答申をまとめるためには多大な労力と時間を要する事となった。（高橋原［2002］47頁）まず、この会合は当初「議論百出、更に根本問題に入り、議論は動もすれば逆戻りせんとする傾向ありしが、後殆ど座談的となりたり」という状態でなかなか議論が進まなかったのである。（渋沢青淵記念財団竜門社編［1960］第46巻、590頁）例えば阪谷芳郎から「元来個人主義と家族主義との衝突は日本国民道徳を破壊するものなり。故に大に家族主義と為すべし（忠孝）この主義を明言されたし」といった注文が提起されたりしてメンバー間の思想上の隔たりは大きく、一致点を見出す事がいかに困難であったかを推察することができる。（渋沢青淵記念財団竜門社編［1960］第46巻、597頁）

発足から4ヶ月経った7月の第4回委員会でようやく宣言の文案を姉崎に一任して起草する事を決めている。（渋沢青淵記念財団竜門社編［1960］第46巻、597頁）姉崎は「国民精神ノ養成」という項目において「社会道徳ノ涵養ハ、政治教育以外、更ニ宗教文芸学術ノ力ニ待ツコト多ク、実業殖産ノ道ニ依リテ民ニ恒心アラシムルコトヲ要ス」と述べた宗教の役割に言及する草案を盛り込んだ。（渋沢青淵記念財団竜門社編［1960］第46巻、601頁）

姉崎は項目として、「共和一致ノ要、政治ト公論、公共ノ精神ト人格ノ尊重、国粋ノ保存ト発達、新事物ノ採用、教育ノ実効、道徳ト事物ノ整調共同、国際道徳ノ真義、西洋文明ト東洋文明、国際和親ノ注意」の9項目から説き起こした。（『帰一協会会報』第7号、渋沢青淵記念財団竜門社編［1960］第46巻、600～602頁）

それに対し、佐藤鉄太郎からは「国粋保存ニ傾クヲ要ス」とか「日本人全体ニ国家ニ対スル

態度ガ冷淡ニ失ス」、「Militarismニ対スル覚悟、東洋ノ盟主タルベキ覚悟等ヲ強ク宣言スルヲ要ス」といった意見が出されたりしている。このような意見に対して渋沢は「成功スレバ仮令悪キコトニテモ可ナリト云フ如キ考ヲ懐カシムヘカラズ」「国際間ニモ道徳アリ、此ノ点ヲカク宣言セザルベカラズ」「自己サエヨケレバ可ナリトノ風潮ガ社会一般ニ行ハルルニアラザルガ、此ノ点ヲモ注意スルヲ要ス」と答えてこのような軍事的覇権主義の主張を牽制している。（『帰一協会会報』第7号、渋沢青淵記念財団竜門社編［1960］第46巻、603頁）

その後、浮田によって別案として「第3案乙」が起草され、それを渋沢が修正した案「第4案」が提出されている。浮田案では「先帝ノ遺詔ニ基キ、憲政有終ノ美ヲ済スベシ」という一文があったが、それを渋沢は「公共ノ精神ヲ涵養シ、以テ憲政ノ本旨ヲ貫徹スベシ」と国家主義的な表現を和らげている。（渋沢青淵記念財団竜門社編［1960］第46巻、608～610頁）「第4案」を確定に向けての原案とすることが決定し、その後も別案提示等の曲折もあったが、この渋沢案が最終案の骨子となっていった。（渋沢青淵記念財団竜門社編［1960］第46巻、613頁）

1915年12月にようやく決定を見た「宣言」は「一、自他ノ人格ヲ尊重シ、国民道徳ノ基礎ヲ鞏固ニスベシ　二、公共ノ精神ヲ涵養シ、以テ立憲ノ本旨ヲ貫徹スベシ　三、自発的活動ヲ振作スルト同時ニ、組織的共同ノ発達ヲ期スベシ　四、学風ヲ刷新シ、教育ノ効果ヲ挙ゲ、各般ノ才能ヲ発揮セシムベシ　五、科学ノ根本的研究ヲ奨励シ、其ノ応用ヲ盛ニスルト共二、堅実ナル信念ヲ基礎トシ、精神的文化ノ向上ヲ図ルベシ　六、国際ノ道徳ヲ尊重シ、世界ノ平和ヲ擁護シ、以テ立国ノ大義ヲ宣揚スベシ」よりなるものであった。[(4)]

この「宣言」制定のプロセスは、帰一協会の一致点を外部に表明することでは大きな成果と言えるかも知れないが、最終文面には「宗教」という言葉さえも盛り込まず、宗教の役割や位置づけには一切言及しないものになった。既存宗教間の隔たりの大きさ故に宗教という言葉に対する何らかの共通理解を得る事さえも困難だった事を示すものでもあった。またこの問は渋沢によって会員に投げかけられたにもかかわらず、そのとりまとめに渋沢自身がイニシアティブを発揮しなければとりまとめられなかったことをも渋沢に突きつける結果となった。

しばらくたった1921年5月の門社春季総会で渋沢は「利弊相伴を警む」と題する挨拶をおこなっている。帰一協会に関して自分自身は無宗教で論語の教えを信じる事を改めないが「多数に就いて考へてみると、矢張一つの看板を掲げる宗教が必要であろう」と述べており、統一的な宗教に対する期待を捨てていない事が表明されている。（『龍門雑誌』第559号、5頁）

毎回の例会内容を余すことなく収録して年2回欠かさず発刊されていた『帰一協会会報』は1916年の第8号以降、丸4年に渡って発刊されず、1920年に再開された発刊も4号を以て途絶えた。その間、『叢書』という形での意見表明は続くが、会の自由な議論を伝えるものではなくなっている。井上哲次郎は「いろいろな人がいろいろな意見をかはるがはるに述べるのみで、宗教は寧ろ不帰一の傾向になって来たので、宗教的信念より云へば、予期した所より寧ろ横にそれて行った感がある。初一念の真精神を失って末梢的になっていったことは確かである」と述べている。（井上哲次郎「渋沢子爵追憶談」1941年、渋沢青淵記念財団竜門社編［1960］第

46巻、418頁）

渋沢の1928年の帰一協会に対する言葉として「今では宗教団体でもなく、学問的研究の会でもなく、単に一種の相談会として存在してゐる始末で、私も滅多に顔を出さない」とあり、会が期待はずれになっている事を表明している。姉崎も「子爵（渋沢）が失望されたと云ふことは確かです」と認める発言を残している。（『雨夜譚会談話筆記』渋沢青淵記念財団竜門社編［1960］第46巻、413･416頁）

姉崎が渋沢死後の談話として「『帰一宗を作るや否や』といふ問題は予備討議中に縷々出た論点であって、青淵翁のお考にはその傾向があったと共に成瀬君にも同じ傾向があり、此点は他の数人と少し異なってゐた」と述べている。さらに「人心感化について青淵翁のお考は、やはり徳川時代の儒教風に、『上の徳は風、民の徳は草』といふ様に、先達者が良い教を立てて之を民に与へるといふ傾向があった様に思はれる」と評している。（姉崎正治「青淵翁と宗教問題」『龍門雑誌』第542号、1933年11月、渋沢青淵記念財団竜門社編［1960］第46巻、729頁）

このような渋沢に対して姉崎は「現下の宗教問題にとって重要な点は、諸宗の粋を集めやうとする企てではなく、諸宗教各々の特色と主張とを以て感化を及ぼしてゐる事は、之を尊重するが、・・（中略）・・諸宗教各々其能を尽しつつ、而かも其間に清算所といふべき機関を必要とする。・・（中略）・・清算所といふ考は、銀行業の経験に富んだ青淵翁には最も納得し易い点であった様に考へる」と回顧しているが、行動の人・渋沢にはこの会に期待した目的を果たし得るものとは写らなかったと言っていいだろう。（渋沢青淵記念財団竜門社編［1960］第46巻、730頁）

姉崎はさらに続けて「帰一協会の趣旨は、通常いふ意味の宗教だけでなく、異なる国々、民族、階級、人種などについても、同様清算の役目を勤め、此に依って、人類文化の将来に対して、人心の根底から共同和衷の精神に進みたいといふを目標とするに努めたのである。・・・・青淵翁の労使協調其他多くの社会事業に尽されたのも、翁の儒教主義から出た帰一努力の一面だと信じている」とあるように渋沢のエネルギーは思想を人々の行動に反映した活動に移っていったとも言えよう。（渋沢青淵記念財団竜門社編［1960］第46巻、730頁）

おわりに

渋沢は明治後半期以降、文明がある程度高度に発達してきたにもかかわらず、かえって社会全体の福利向上よりも個人を優先する価値観となっていることに危機感を抱いた。それ故に経済道徳の後退に対して抜本的な対処の必要性を感じはじめていた。同時に世界が軍事力に基づく帝国主義の膨張に覆われ、その結果として激しい民族間の対立と第一次世界大戦の勃発となったことに大きなショックを受けた。武力・軍事力以外での解決や緩和の必要を痛感し、世界的な規模での道徳の必要性を追い求めたのであった。

この当時、帰一協会に参加した浮田和民は「倫理的帝国主義」を主張し、欧米流の軍事力に基づく帝国主義に対し、東洋独自の倫理観による対抗を主張していた。（武田清子［1987］、姜

克實［2003］参照）この考えそのものを渋沢が支持していたかどうかについては確証を得ることができないが、帝国主義の膨張に対して浮田に近い立場で倫理観の共有で食い止める事に期待を持ったと考えてもいいのではないだろうか。

渋沢は普遍的な道徳観や倫理要素の抽出をめざした。成瀬仁蔵などと共に統一宗教に近いものも当初は志向していたが、宗教学者や宗教家との溝は大きく、当初の目的を達成する事は断念せざるを得なかった。そこには渋沢の宗教と道徳心・倫理観との相違に対する認識の違いがあった。渋沢は道徳や倫理の単線的な延長上に宗教を考えていた。それは各宗教に独自の儀式・儀礼、宗教行為を否定することでもあり、宗教家や宗教学者の反発を受ける事になった。

渋沢は帰一協会への参加を通じて、宗教統合につながるような統一的な倫理観の抽出はきわめて困難なことを学んだ。諸宗教間に共通する倫理観を調整する仕組みはもしかすると可能かも知れないという感触を得るがこれさえも難しい事を知ることとなる。ましてや儒教倫理観を共通倫理観の中心に据える事を他宗教に理解させる事は不可能なことも学んだ。いずれにせよ、渋沢の失望感は大きく、宗教観や価値観の一致の難しさを認識し、その後の社会の軋轢回避への行動に大きな影響を与えたのであった。

それでも渋沢は道徳観を高めるために既存宗教に頼る道を選択しなかった。従来からの手法である『論語』を説明言語として通俗的な道徳観とも言える社会道徳を繰り返し唱えたのであった。またマルクス主義の台頭に基づく労使間の軋轢にも、例えば修養団のような宗教的な要素を利用しながらの労使一体感の醸成には一定の距離を置いていた。（渋沢青淵記念財団竜門社編［1960］第43巻673～674頁）協調会での争議調停活動に熱心に取り組んだ事に代表されるように、観念世界や神秘性や非条理、不合理を廃した合理性レベル、現実世界での共通点・一致点を見出す事にあくまでこだわった経営者であったと言えよう。

（注）

(1) この会の目的として「一国文明の基本を確立するために道徳、教育、文学、宗教などの精神的問題に関して堅実なる努力と真摯なる研究」と位置づけている研究もある。（磯前順一・深沢英隆編［2002］62頁）

(2)『帰一協会会報』は13号まで発行された。1913～16年の間は年2回発行され、しばらく発行されず、1920～25年におおよそ年1回発行された。また『帰一協会叢書』が1916～25年にかけて計10冊発行されている。その後は手書き謄写版刷りのごく簡単な会報が発行されていた。

(3) 1927年12月に発行された『帰一協会会報』第3号で幹事に服部宇之吉が加わっていることを確認できる。

(4) この時期、この作業と平行して、渋沢は第一次世界大戦の勃発への対応を巡って、「道徳といふものも、世が進み文明が向上するに随って、更に良い方に進化しさうなものであるが、どうも道徳の進化は、他の生物の進化と同様に行かないのは、どういふものであるか」と疑問を投げかけ、「国際上に於いては、仁義道徳と生産利殖とは全く反対にして、常に国際上の生産には道徳を無視して居るやうに見受けられる」と述べた上で、3つの問題提起をしている。それは「第1　仁義道徳といふものは生産殖利といふものは全然一致すべきものなる乎」、「第2　道徳といふものは他の科学の進化する

如く世の文明に伴ふて進化すべき乎」、「第3　教育修養は其本質までも変化し得るものなる乎」の3点であった。（渋沢栄一「経済・道徳及び教育に関する疑問」『帰一協会会報』第6号、1915年11月、渋沢青淵記念財団竜門社編［1960］第46巻、500～504頁）いかに渋沢が新たな文明社会全般における道徳心の欠如を深刻に受け止めていたかがわかる。

文献リスト

浅野俊光［1991］『日本の近代化と経営理念』日本経済評論社
磯前順一、深沢英隆編［2002］『近代日本における知識人と宗教：姉崎正治の軌跡』東京堂出版
植松忠博［1998］「渋沢栄一の『市場と国家』論」京大社会思想研究所『再構築する近代－その矛盾と運動』全国日本学士会
沖田行司［1992］『日本近代教育の思想史研究：国際化の思想系譜』日本図書センター（新訂版、学術出版会、2007年）
沖田行司［1999］「国際交流を推進する平和主義教育構想」渋沢研究会編『公益の追求者渋沢栄一』山川出版
小野健知［1979］「渋沢栄一と経済倫理」『日本大学精神文化研究所・教育制度研究所紀要』第10集
影山礼子［1990］「成瀬仁蔵と渋沢栄一－その交流と教育思想における接点－」『渋沢研究』第2号
木下順［1995］「日本社会政策史の探求（上）地方改良、修養団、協調会」『国学院経済学』44巻1号
木下順［1997］「協調会の労務者講習会」『大原社会問題研究所雑誌』458号
木村昌人［1989］『日米民間経済外交：1905～1911』慶応通信
是澤博昭［1992］「「青い目の人形交流」誕生の背景とその波紋－日米関係改善に向けての一つの試み或いは渋沢栄一、L･ギューリックの見た夢－」『渋沢研究』第5号
坂本慎一［2002］『渋沢栄一の経世済民思想』日本経済評論社
坂本慎一［2004］「草奔の後期水戸学としての渋沢栄一思想」川口浩編著『日本の経済思想世界』日本経済評論社
島田昌和［1989a］「1920年代後半における協調会の活動－争議調停活動の検討」『経営論集』（明治大学経営学部）、第36巻第2号
島田昌和［1989b］「協調会の設立と経営者の労働観－日本工業倶楽部信愛協会案をめぐって－」『経営史学』第24巻第3号、経営史学会
島田昌和［1990］「渋沢栄一の労使観」『渋沢研究』創刊号、渋沢史料館
島田昌和［1995］「経営者の労働観」『大企業時代の到来（日本経営史5）』岩波書店
渋沢青淵記念財団竜門社編［1960］『渋沢栄一伝記資料』（全58巻）渋沢栄一伝記資料刊行会、（別巻10巻）渋沢青淵記念財団竜門社
姜克實［2003］『浮田和民の思想史的研究－倫理的帝国主義の形成』不二出版
瀬岡誠［1976］「渋沢栄一における革新性の形成過程」『大阪大学経済学』第26巻第1・2号
瀬岡誠［1977］「渋沢栄一におけるイデオロギーと革新性」『大阪大学経済学』第26巻第3・4号
瀬岡誠［1989］「田沢義鋪の労務管理思想の形成過程－社会化の過程」を中心に」『社会科学』42号
高橋原［2001］「姉崎正治と帰一協会－結成の理念と昭和初期の活動について」『日本女子大学総合研究所ニュース』第10号
高橋原［2002］「帰一協会の理念とその行方－昭和初期の活動」『東京大学宗教学年報』第20号
高橋彦博［2001］『戦間期日本の社会研究センター－大原社研と協調会』柏書房
多田顕［1979］「福沢諭吉と渋沢栄一の思想について－特に儒教を巡って－」『千葉大学教養部研究報告』

A-12
多田顕［1980］「渋沢栄一の思想・行動とモラロジー」『モラロジー研究』第9号
武田清子［1987］「浮田和民の“倫理的帝国主義”－比較文化的アプローチ」武田清子『日本リベラリズムの稜線』岩波書店
土屋喬雄［1967］『続日本経営理念史』日本経済新聞社
綱沢満昭［1997］「蓮沼門三について」『近畿大学教養学部紀要』第29巻第2号
永安幸正［1985］「渋沢栄一」（モラロジー研究所『日本の近代化と精神的伝統』広池学園出版部）
平田哲男［1983］「「企業国家主義」の精神的培養基－修養団のイデオロギーと運動」『歴史評論』394号
法政大学大原社会問題研究所編［2004］『協調会の研究』柏書房
松川健二［1999］「行動の指針としての『論語』－義と利の間」（渋沢研究会編［1999］）
松村憲一［1973］「近代日本の教化政策と「修養」概念－蓮沼門三の「修養団」活動」『社会科学討究』19巻1号
George M. Oshiro ［1990］ Shibusawa Ei‘ichi and Christian Internationalization An Exploratory Case Study of a Prewar Elite‘s Attitude and Activities Regarding Select Aspects of the Inetrnational Christian Movement in Early Twentieth Century Japan （大城ジョージ［1990］「キリスト教による国際化と渋沢栄一－20世紀初期の国際キリスト教運動に対する戦前日本エリートの思想と活動－（英文）」『渋沢研究』創刊号）
『帰一協会会報』帰一協会